28

23

ビルマ作戦關係の質問に對する回答

一九五〇、六、二八
第一復員局資料整理部

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

註　本回答は第一復員局資料整理部に於て特に左記の者の意見をも参考として作つたものである。

元南方軍作戦主任参謀大佐　荒尾興功（アラオ オキカズ）

元ビルマ方面軍作戦主任参謀大佐　不破博（フワ ヒロシ）

元第十五軍作戦主任参謀大佐　吉田元久（ヨシダ モトヒサ）

元第三十八師團参謀大佐　登坂通（トサカ ススム）

同　中佐　細川直知（ホソカワ ナオトモ）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一、質問はの答

大本營は當初からビルマ全域の占領を企圖してゐたが南方作戰に使用し得る總兵力が不足であつたので開戰時の計畫としては首都ラングーンを含む南部ビルマのみの占領に止めビルマ全域の占領は狀況之を許すに至れば實施することに決定した。開戰後南方作戰が有利に進展し兵力の余力を見透し得るに至つたので大本營は一九四二年一月二十二日ビルマ全域の占領を決意し之を南方軍總司令官に對し命令した。從つて一九四二年一月末から進入作戰が開始された當時に於て北部泰ーケンタン方面又はシヤン州方面よりビルマに進出する考へは問題外の事であつた。但し此の方面には泰國軍が牽制作戰を行ふ所く豫定された。

ビルマ全域の占領を決意してから後の作戰に於ても大本營及現地軍共に終始先づ當初の作戰目標たるラングーンを占領したる後中北部ビルマを占領する考へであつた。しかしサルウイン河渡河よりラングーン占領迄に於ける作戰が極めて順調に進捗し英印軍の作戰が全

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

面的に崩壊しつゝある狀況を感知し得たので兩方總軍はラングーン占領後後續兵團（第十八、第五十六師團）の到着を待つことなく速に中北部ビルマに向ふ作戰を放棄果敢に實施する樣指導した。

北部泰から中北部ビルマ方面に一挙に作戰する考へはビルマ全域占領を決意した後に於ても全く無かつた。それは地形上極めて困難であると考へられていたので問題になれなかつた。

三、質問(2)の答

當時の情勢或中英印支連合軍の實情が質問の如き作戰を許すものとは的確には理解し得なかつた。

しかし兩方軍の參謀部はかゝる作戰を考へないでもなかつたが第十五軍の實情は泰緬國境突破以後に於ける長期の作戰に疲勞し補給も不充分であり此の上かゝる作戰を要求することは無理であると考へた。

第十五軍は當時の情勢を次の如く理解してゐた。

イ、ビルマに在る英印軍及中國軍兵力に關する判斷上ビルマ全域占領

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の爲には第十五軍の兵力は不足であり且雨期よりする陸路補給では爾後の作戰を期ひされない。速かにラングーンを占領し海路に依り兵力の增强と補給の確保を圖ることが必要である。

2、當時の情報に依ればシッタン河畔から後退した英印軍の主力はラングーンを確保する算大であり此の英印軍主力を擊破せずに主力を以て當時トングー附近に接近しつゝあつた中國軍に向ふことは危險である。

尙ラングーン周邊には相當の防禦施設が施されつゝある。

三、質問(5)の答

四三年一月以前に於ける第五十五師團當初の任務は次の通りであつた。

師團は主力を以てプチドン、ドンベイタの線以南のアキヤブ周邊の要域を確保すると共に一部を以てラテドン、モンドウの線附近を抑え敵の進出を成るべく遠く阻止すべし

又右師團の當初の任務はその後變更せられた所のイムペール長チン

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

スキヤ方面に對する作戰とはその當時に於ては何等關連性を持たせていなかつた。

四、質問(7)の答

四四年二月中英印軍に對して行われた日本軍の主要なる作戰目的は近く開始すべきインパール作戰の企圖を秘匿することゝ成るべく多くの英印軍をアラカン方面に牽制してインパール作戰を容易ならしめることであつた。

右作戰は第五十五師團の全力を以て果敢なる斬込戰法を反覆强行して行はれその結果敵の第一線たる英印軍二ケ師團を終始擾亂に勞くと共にその後續部隊を該方面に牽制し得たと考へられた。

五、質問(8)の答

四四年五月中日本軍の一部がカラダン河谷を北上し印緬國境に進したに拘らず爾後前進せずその後撤退した時の日本軍部隊の企圖はアキヤブ平地を廣く確保するためにはチタゴン―コックスバザー―アキヤブ道方面を孤守するのみでは不十分であつてチタゴンから北

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

方山中を迂回してカラダン河谷に通ずる谷地をも併せ抑えねば目的を達成し得ずと覺つたからこそカラダン河谷に一部を派遣したのである。爾後撤退したのは該方面から有利なる英印軍が進出して來たので到底拒止し得ないと判斷したからである。

六、質問(四)の第二項の答

大本營は一九四二年六月二十九日南方軍に對し「印緬國境を越えて行ふ作戰は大本營の認可を受けねばならぬ」旨を命令してゐた。それは大本營が主として印度に對する政略上の考慮から現地軍の對印作戰の決定權を留保したものである。此のことは當然南方軍から第十五軍（後ビルマ方面軍となる）に對しても命令されてゐた。

從つてインパール作戰を實行するに方りてはビルマ方面軍は南方總軍の認可を南方總軍は大本營の認可（實施せよと命令するのではなく實施しても宜しいと許可することを意味する）を夫々受ける必要があつた。

そこでビルマ方面軍及南方軍は夫々その手續を取り之に對し大本營

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

が認可を與へたのである。即大本營は一九四四年一月七日（質問に九日とあるは誤りである）南方軍に對し「南方軍總司令官はビルマ防衛の爲適時當面の敵を撃破してインパール附近東北部印度要域を占領確保することを得」と指令した。

しかし此の正式の認可が與へられる迄にはかなりの經緯があつた。南方軍に於ては當初作戰の成否に大なる危惧の念を抱き數次に亘り作戰の事能性と必要性に就て檢討を行ひ大本營も亦極めて慎重なる態度を取つてゐた。しかし結局に於てビルマ方面軍の作戰の成算十分なりとの強い意見具申に對し南方軍他方面軍を同意し次で南方軍より大本營に認可を求めたので遂に大本營も之に動かされて認可を與へたのであつた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

七、問(ロ)の(ハ)の第四項の答

日本陸軍中央統帥部は當時ベンガル灣の制海權を握り得たとは思はなかつた。

(質問者は日本軍が三隻の巡洋艦を撃破したゞけでベンガル灣の制海權を握つたと見做してゐるが日本側としては今日に於てもそうは考へない)

尤も日本陸軍としては一九四二年四月のベンガル灣に對する作戰に依り日本軍がベンガル灣の制海權を握り得たか否かと云ふことは問題にしなかつた。なんなれば此の作戰は海軍獨自の作戰であり陸軍がその作戰の成果を利用してベンガル灣方面に對し新作戰を行ふと云ふか如き企圖は全くなかつたからである。又日本海軍としても右作戰の目的は太平洋方面に於ける對米主作戰を容易ならしむる爲ベンガル灣方面の英海軍勢力を出來るだけ壓破して同方面よりする英海軍の脅威を除かんとするに過ぎないものであつた。

八、問(ロ)の(ハ)の第五項の答

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

戦略上日本軍が攻勢（主動）より守勢（受動）に転じたと云ふ意味に於ては田中元海軍中将の意見に完全に同意する。しかし戦争の勝敗を決した転機と云ふ意味に於ては一つの有力なる観察として同意する。

此の意味に於ける戦争の転機が何れであるやは各々人に依り異なり日本側として未だ定論はない。しかしミッドウェーの敗戦ガダルカナル奪回の挫折サイパンの失陥の三者の何れかを以て戦争の転機と見做す者が多数である。

九、質問(四)の答

昭三年の雨季明け頃から逐次鉄道爆撃が盛になり四四年に入つてから殆ど夜間運行に終始するの止むなきに至つた特にマンダレーの南方ミンゲの橋梁は四三年の雨季明け以降連続的に爆撃せられ修復の暇もなき狀況に陥り更に四四年になつてサンダーンやマンダレーの鉄道修理工場が徹底的に破壊せられたので特に機関車の修理能力激減し鉄道輸送力の大削減を見るに至つた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

又四四年イムバール作戦開始直前ミートキーナ線潜線各地に英軍の空挺部隊の降下する頃より以降は敵線は文字通り敵の小型爆撃機により寸断せられ局地運行も殆ど不可能となつた。

七、質問(4)の答

一般的慣例ではない。

然し次の如き場合にはかゝることが屢々あつた。

イ、砲兵火力を特に重視する戦闘に於て砲兵指揮官の指揮下に歩砲連合の部隊を編組し該砲兵指揮官をして一方面の戦闘を担任せしむる場合

ロ、単に砲兵掩護の為歩兵部隊の配属を必要とする場合

ハ、歩兵部隊と砲兵部隊とが指揮関係を律せられることなく別せずして同一地に於て戦闘し砲兵部隊指揮官が歩兵部隊指揮官より上級先任である場合

八、質問(4)の(ロ)の答

計画としては取り立てゝ会戦期間を予定しなかつた。但し本防禦線

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

たる城門府水池東面の陣地に對しては約一週間の攻撃準備期間を設ける計畫であつた。

而して右本防禦線を電撃破し九龍半島を攻略せば香港島は降伏するの算大なりと予想した。從つて大本營は香港作戰は約二週間位で終了するものと判斷し第三十八師團をジヤバ作戰の爲轉用する如く腹案を立てた。

吉岡(1)の(ロ)の答

東北地區に對する攻撃が失敗した場合更めて南方海岸に上陸すると云ふが如き考へはなかつた。

但し東北地區に對する上陸の當日陸軍が南方海岸に對し上陸を企圖するが如き陽動を行ふ計畫であつた。

吉岡(1)の(ハ)の答

取り立てゝ述べる程の準備はなかつた。

吉岡(5)の答

陸軍としては南方に對する補給の伸縮基地として使用した。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五同(6)の(ヰ)の答

かゝる事實は全然ない。

六同(ヲ)の答

日本軍は香港攻略部隊に對する補給を廣東より水路（珠江及珠江河）を利用して行つた（其揚陸地點は深圳西方の寶安）ので支那軍より何等の妨害を受けなかつた。又支那軍は日本軍をして當初の作戰計畫の變更を餘儀なからしめる程の效果ある牽制作戰を行はなかつた。日本軍の第二十三軍は香港作戰に當り軍主力（第五十一師團主力及第百四師團）を廣東北方地區に配置して廣東周邊要域を確保するの外香港攻略部隊の背後を直接掩護する爲第五十一師團所屬の歩兵一聯隊及砲兵一大隊基幹の一支隊を淡水附近に配備した。香港作戰開始に伴ひ軍主力前面の支那軍約八箇師が廣東東方地區に移動し約一個師半の支那軍は右支隊の前面に近く進出して來たが積極的行動を取らなかつた。若し之等の支那軍が果敢なる攻勢を取つたなら日本軍には大なる脅威となつたであらう。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp